

# 総称文の多様性と認知能力の複合性\*

## —— 社会的偏見の克服に向けて ——

### (The Variety of Generic Sentences and the Compound Cognitive Abilities)

岩 部 浩 三

#### 0. 総称文研究の新しい枠組み

近年、Leslie (2007, 2008) によって、総称文研究が新しい展開を見せていることは岩部 (2014) において紹介したとおりである。Leslie は、総称文が数量詞を身につける前の幼児にも容易に使いこなせることから、総称文は人間が生まれながらに持つデフォルト的認知能力を反映した表現であると主張している。第1節ではこのような Leslie の主張とそれを支持する最近の研究について概観する。

第2節では、総称文は社会的偏見の根源に関わるという負の側面を持つこと、そしてその克服が可能であるかを論じる。哲学者としての Leslie の関心が社会的偏見の克服に向かっていることは、Leslie (in press) 等の一連の著作を見ても明らかである。<sup>1</sup> しかし、その解決の方法はまだ明確には示されていない。認知的な課題として取り組まれてはいるが、言語学的な視点からその解決の道を示すことはなされていない。本稿では、現時点で可能な限りにおいてその方向を示したいと考える。

第3節では総称文の多様性とデフォルト的認知能力の関係を考察する。英語において最も一般的な総称文は無冠詞複数形 (Bare Plural (以下 BP と略記)) であり、他に不定単数形 (Indefinite Singular (以下 IS)) と定単数形 (Definite Singular (以下 DS)) の3つの形がある。用法上最も制限のないのが BP であり、IS や DS の用法は狭く限定されることが知られている (IS については、Lawler (1973), Greenberg (2003), Prasada (2010) を参照。DS については Carlson (1977), Krifka et al. (1995) を参照)。本稿では、「認知能力の複合性仮説」を提案し、デフォルト的認知能力を反映した総称文形式 (BP) の他に、論理的・数量的認知能力に基づいた総称文形式 (IS) が

あり、その使い分けによって社会的偏見という負の側面を克服できる可能性がある、という見通しを示したい。

第4節では、社会的偏見の克服を難しくしている要因として、BP 総称文が多義的であること、人間が本質主義的信念 (Essentialist Belief) を持ちやすいことを指摘する。

第5節では、「認知能力の複合性仮説」の普遍性から他言語への予測を論じる。この仮説が正しいとすれば他言語の総称文においても多様性が見られるはずであり、その一例としてフランス語と日本語の例を採り上げる。

## 1. 総称文とデフォルト的認知能力について

総称文は、英語では単純現在形という最もシンプルな形式で表され、一般化された形で知識を整理するのに貢献している。例文 (1) (2) はいずれも容認可能な総称文であるが、その主語を明示的な数量詞で表そうとすると、解釈が大きく異なっていることに気づく。

- (1) Tigers are striped. (トラには縞模様がある)
- (2) a. Sharks attack bathers. (サメは海水浴客を襲う)
- b. Mosquitoes carry the West Nile viruses.  
(蚊は西ナイルウイルスを媒介する)

ほとんどのトラには縞模様があり、(1) には all あるいは most がふさわしいのに対して、(2a) の実際に人を襲うサメも、(2b) の西ナイルウイルスを媒介する蚊の数もきわめて少数であり、せいぜい some を当てることができるに過ぎない。すなわち、(1) や (2) のような総称文について、数量に基づいた詳細な意味記述をしようとする、両者を統一的に記述することはできない。総称文については言語学的に様々な研究がなされており、その成果は Carlson and Pelletier (1995) *The Generic Book* 等にまとめられ、その後の Cohen (1999) の研究等にも引き継がれているが、(1) と (2) に見られる解釈の違いを説明する困難さは克服されていない。

総称文にはこのような困難があるにも関わらず、3歳以前の幼児が総称文を身につけていることに Leslie (2008) は注目した。また、Gelman et al. (in press) が実験によって確かめたように、all や some のような数量詞が4歳以降に習得されることから、「総称文は数量詞文と異なりデフォルト的認知能力と結びついている」と Leslie は主張している。とりわけ、(2)

のようなごく少数の例にしか当てはまらない総称文を Striking Generic と呼び、デフォルト的認知能力との密接な関係を指摘した。Striking Generic には、例えば (2a) のように人間にとって生死にかかわるような危険性を述べた例が非常に多い。サメに遭遇した場合、(2a) の数量的な意味合いをじっくり吟味しているよりも、(2a) を直観的に信じて素早く逃げる方が生存の可能性が高く、それは幼児段階では特に重要な意味を持つ。数量詞を身につけた大人にとっても、危険を避けるという点では同様である。実際に人を襲うサメが some なのか most なのか all なのかを考えるより、とにかくサメという種を見分けてそれを避けるように行動した方が安全である。現実問題として、危害を及ぼすサメの数が some に近いものであったとしても、危険なサメと安全なサメの区別が一般人には容易でない以上、潜在的には種全体が危険であると認識して避けた方が安全につながる。このように生存に有利に働くところを進化論的に解釈すれば、我々は Striking Generic をそのまま受け入れた人の子孫であると言えなくもないであろう。また、犬や猫などの高等哺乳動物にも同様の一般化能力があることも考えられ、人間が言語能力を十分に発達させる前からデフォルト的認知能力を持ち、その能力と原始的な文形式が結びついて総称文が成立しているとも考えられる。

Leslie が指摘しているように、デフォルト的認知能力は直観的で Kahneman (2011) の言う「速い思考 (= システム 1)」に相当し、論理的・数量的な「遅い思考 (= システム 2)」と対比される。<sup>2</sup> そして人間はその両方の能力を備えているとされている。総称文の解釈は確かに非数量的である。

- (3) Lions have manes. (ライオンにはたてがみがある)
- (4) Lions are males. (ライオンは雄である)

総称文として (3) が受け入れられるのに対して、(4) は受け入れられない。たてがみのあるライオンは雄の成獣であるから、数量的には (4) は (3) と同等かそれ以上の数によって支えられるはずであるが、実際はそうならない。Brandone et al. (2012) の実験によれば、5歳児においても同様の結果が得られ、5歳児はたてがみのあるライオンが雄に限られることを理解しながらも (3) を真、(4) を偽と判断する。総称的一般化は、種の特徴的な性質であるかどうかによるものであって、統計的・数量的な値によるものではない。何が種の特徴となりうるかという問題は簡単な解答を許さないが、根

源的には危険性が一つの大きな要因であろう。ライオンは人間にとって危険な動物であり、それを瞬時に見分けることが重要である。雄の目立つたがみは、その周囲にいる雌も含めてライオンという種の特定に役立つと言える。

我々は、幼い間に種の特徴を自発的に学ぶ能力を持つが、もちろんその特徴がいつも危険性に関係しているわけではない。

(5) Ducks lay eggs. (アヒルは卵を生む)

(6) Peacocks have pretty blue-green tails.

(クジャクには青緑色のきれいな尾羽がある)

(5) は食用にできる卵を生むところが人間にとって重要なのであろうし、(6) については美しいことが種として価値があるのであろう。必ずしも危険性に限らず、総称文を通して人間にとって有意義な一般化を幼児が急速に身につけていることは間違いない。

このように、総称文は生まれながらのデフォルト的認知能力に深く関わっており、数量詞の獲得以前に総称文を使いこなせるようになっている。Gelman et al. (in press) は、3 歳児が総称文を正しく理解している一方で、all や some の含まれた数量詞文は使いこなせず、それらをすべて総称文と同様に解釈していることを実験により明らかにしている。

## 2. デフォルト的認知能力と社会的偏見

子供の総称文解釈が大人と同様であるということは、逆に大人もデフォルト的認知能力をそのまま維持しているということでもある。すでに述べたように、大人にとっても危険を避けるということは重要な問題であり、総称文がそれに寄与しているのである。ただし、そのことが同時に社会的偏見をもたらす原因にもなっていると Leslie (in press) は指摘している。

(7) Muslims are terrorists. (イスラム教徒はテロリストだ)

ごく少数のイスラム教徒がテロ事件を起こしたことから、(7) のような一般化がなされるとすれば、それは我々が生まれながらに持つデフォルト的認知能力のためであると言わざるを得ない。そこには統計的数値への依存も論理性も見られない。一般化の対象が人であるかないかという違い以外、(2)

のような例と一般化の図式自体は変わらない。そして、見かけ上の特徴を基に危険な動物を見分けるのと同様、服装や行動様式から特定グループの人間を見分け、そのグループ全体を避けようとする。それだけではなく、グループ全体に対して差別的攻撃的な態度を取ることもつながっている。

次の(8a)は総称文ではなく条件文+命令文の形態を取っているが、認知的には同等の例と考えられ、(8b)のような総称文に書き換えられるであろう。

- (8) a. 人を見たら泥棒と思え。
- b. 人間は悪である。

(8a)を文字通りに解釈して行動することは馬鹿げており、その非論理性に気づかない人はいない。<sup>3</sup> それにも関わらず、(8a)がことわざとして一定の役割を果たしているのは、やはり危険回避という文脈においてである。<sup>4</sup> 岩部(1998)において、世の中の実情に合う内容を論理的に示すならば、(8b)ではなく(9)のように二重否定構造をとると述べた。

- (9) 「人間は悪ではない」とは言えない。

論理的に等価ではない(8b)と(9)の違いを飛び越えてしまうほどにデフォルト的認知能力は非論理的であり、非数量的であることに注意しなければならない。数量詞や否定という論理的認識に関わる言語能力が十分に発達していない段階から、危険を避けて生き延びることは人類にとって重要であり、そのために獲得されたと推測されるデフォルト的認知能力と、それをシンプルな言語形式で表現した総称文の関係を正しく認識しておかなければならない。

### 3. 総称文の多様性とデフォルト的認知能力

すでに述べたように、英語における総称文には、無冠詞複数形(BP)、不定単数形(IS)、定単数形(DS)の3種類があることが知られている。最も適用範囲の広いのがBPであり、ISやDSでは不自然な場合でも容認可能な場合があるとされる。例えば、IS総称文は、種に固有の必然性が述べられている場合のみ総称文としての機能を果たすことが指摘されている。

- (10) a. Dogs have four legs. (犬は4本脚である)  
 b. A dog has four legs. 必然性あり
- (11) a. Tables have four legs. (テーブルは4本脚である)  
 b. ?A table has four legs. 必然性がない

BP 総称文 (10a) を書き換えた IS 総称文 (10b) には「犬は、犬であるがゆえに、4本脚である」という必然性が認められる (Lawler (1973)、Greenberg (2003)、Prasada (2010) を参照)。他方、テーブルと脚の数については、4本脚のテーブルのほかに、1本脚など脚の数の異なるテーブルも当たり前存在していることから、そのような必然性がなく (11b) は不自然である。IS にこのような制約があるのに対し、(11a) のとおり、BP にはそのような制約がないことが知られている。

DS 総称文に対する研究は比較的少ないが、Carlson (1977) や、Krifka et al. (1995) によって DS 主語は「確立された種 (Well-established Kind)」を表すことが指摘されている。

- (12) a. The bottle has a narrow neck. (瓶)  
 b. The Coke bottle has a narrow neck. (コーラ瓶)  
 c. ??The green bottle has a narrow neck. (?? 緑瓶)  
 d. Green bottles have narrow necks. (緑色の瓶)

(12c) の The green bottle は、日本語で言えば、「緑色の瓶」ではなく「緑瓶」であって、「瓶」や「コーラ瓶」と異なり、種として確立されたものではないので、不自然とされている。(12d) の BP 主語 Green bottles は確立された種を表す必要がなく、不自然さはない。

総称文のこのような制約と3つの形式の対応関係についても、従来の研究では十分説明ができていない。一般に意味と形式の対応関係は1対1対応が望ましいとされる (Bolinger (1977))。それが最も合理的な対応関係だからである。ところが総称文の場合は、BP がすべての読みを包括し、IS や DS が限られた一部を担うという不均衡が生じていることに気づく。どうして3形式が均等に分担しないのであろうか。その説明の枠組みとして、Leslie のデフォルト的認知能力の視点と従来の総称文研究の成果を背景に、次のような「認知能力の複合性仮説」を提案したい。

(13) 認知能力の複合性仮説

- a. デフォルト的認知能力に対応する英語総称文の形式はBPであり、これが無標の形式である。また、3歳以前の幼児はそれ以外の認知能力が発達しておらず、ISやDSで区別されるような多様な読みは未分化の状態にある。<sup>5</sup>
- b. 大人になるにつれて数理的・論理的認知能力等が発達し、総称文の読みの多様性が生じ、BP総称文が多義的に感じられるようになる。それとともに多義性を区別する必要性が生じ、特定の読みに対応する別の形式が求められるようになり、ISやDSなど有標の形式がそれを担う。<sup>6</sup> ただし、デフォルト的認知能力は大人になっても失われず、BPはゆるやかで未分化な読みを表すこともできる。

このように大人の認知能力がデフォルト的認知能力と数理的・論理的認知能力等の複合したものであると仮定すれば、英語におけるBP総称文がオールマイティであること、ISやDSが限定された解釈しか持たないことが自然に説明できる。さらに、有標の総称文形式は、数理的論理的認知能力に代表される大人の認知能力を前提とした解釈に対応することが予測できる。

(14a) のように、ごく一部の個体にしか当てはまらないけれども総称文として真であるような例は Striking Generic と呼ばれている。Leslie et al. (2009) によれば、(14bc) に見られるように、Striking Generic の IS と DS はどちらも不自然である。

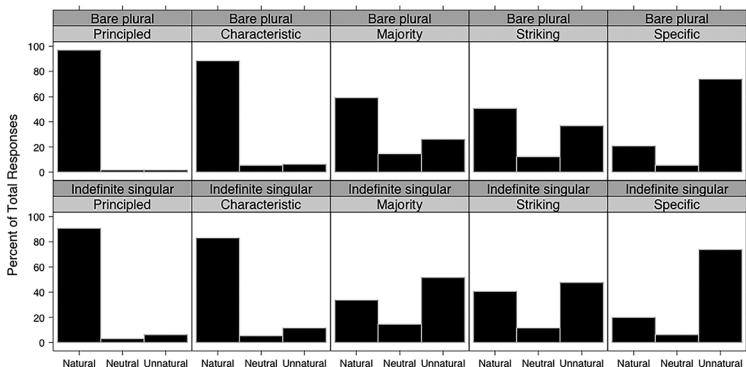
- (14) a. Sharks attack bathers.
- b. ?A shark attacks bathers.
- c. ?The shark attacks bathers.

それに対して、ほぼすべての個体に当てはまる Principled Generic については、(15) に見られるように BP だけでなく IS と DS もすべて自然で容認可能である。

- (15) a. Tigers are striped.
- b. A tiger is striped.
- c. The tiger is striped.

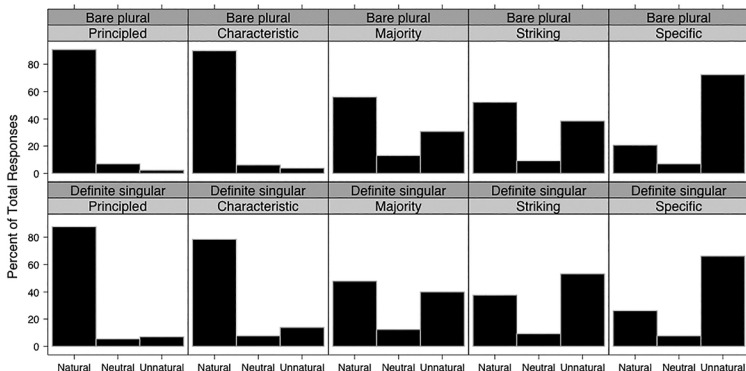
次の(16)のグラフは、Leslie et al. (2009) がBP 総称文とIS 総称文の容認度を実験的に確かめた結果である。Principled Generic に比べれば、Striking Generic の容認度は低く、何とか容認可能とされているBP の例についても不自然とする人との差はそれほど大きくない。また、IS については逆に不自然とする人の方が多く、やはりその差は大きくない。

(16) BP 総称文とIS 総称文の比較 (Leslie et al. (2009))



同様に(17)は、BP 総称文とDS 総称文の比較であるが、Striking Generic の例についてはBP 総称文の容認度自体がそれほど高くはないが、自然であるとする判断の方が多い。それに対し、DS 総称文においては容認度が逆転し、不自然とする判断の方が多くなる。

(17) BP 総称文とDS 総称文の比較 (Leslie et al. (2009))





したがって、Striking Generic が社会的偏見につながるような例 (18) においても、同様の容認度の差があることが予測できる。

- (18) a. Muslims are terrorists.
- b. ?A Muslim is a terrorist.
- c. ?The Muslim is a terrorist.

実際、もう少し穏やかな内容の (19) も含めて、同僚の母語話者の判断からこの差が裏付けられた。<sup>7</sup>

- (19) a. Christians are narrow-minded. (キリスト教徒は心が狭い)
- b. ?A Cristian is narrow-minded.
- c. ?The Cristian is narrow-minded.

IS や DS についての詳細な分析は今後の研究にゆだねるとして、現時点で言えるのは、総称文の使い分けによって社会的偏見を克服する道筋が存在するということであり、これこそがまさに本稿の主張に他ならない。Striking Generic については、必要に応じて BP を危険回避の目的で使用しつつ、同時に IS や DS が容認不可能であることを明確に認識することで、社会的偏見を避けることができるはずである。英語において、総称文が3つの形式を持つことには大きな意味があり、明確に使い分けることで人類にとっての不利益を避けることができるのである。

## 4. 克服すべき課題

### 4.1. BP 総称文の多義性

3つの形式の明確な使い分けという視点から (16) (17) のグラフを見直してみると、実際には IS や DS の判断が不明瞭であると言わざるを得ない。そもそもデフォルト的認知能力しか持たない幼児にとっては、BP と IS や DS との使い分けは不可能であり、論理的・数量的能力が発達して始めてそれらの区別できるようになるはずである。また、仮説 (13) によれば、BP 総称文は無標の形式であって、本来的にすべての用法を許す。幼児の間は区別のない形で使われているが、大人になって論理的・数量的能力が発達してからは、デフォルト的な読み方をすることもできるし、IS と同等の読みや DS と同等の読みを意図して用いることもできる。Kratzer (1995) 等が、

量化 (Quantification) という視点から総称文を分析した際、BP 総称文がその主たる対象となっていた。BP 総称文には確かに数量的に扱える側面もあるが、そのこと自体本稿の主張と矛盾することはない。<sup>8</sup> 大人にとって BP 総称文は多義的であるからであり、量化分析はその数量的な面に、Leslie はそのデフォルト的な面に注目したのである。

また Carlson (1995) は、総称文に対して規則制約的アプローチと帰納的アプローチを対比させ、どちらか一つを取るなら前者であると結論づけた。後者が量化分析に対応すると考えられるが、当時興隆してきた量化分析に対して決して譲歩することなく、Carlson (1977) から一貫して非量化的な分析をとり続けた点は評価できるし、現時点から見ると、デフォルト的認知能力と総称文との関係を正しく認識していたと再評価することもできる。しかし、大人にとって BP 総称文は多義的で、両面性があることを改めて確認しておかなければならない。

#### 4.2. 本質主義との戦い

もう一つの課題は我々の認識に関わる根深い問題である。(16) の Striking Generic の判断において、BP と IS の差があまりないこと、IS がそれほど不自然でないことを Leslie et al. (2009) が指摘している。これには Leslie (2014) が指摘する「本質主義的信念 (Essentialist Belief)」が関わっている可能性がある。例えば、ごく一部のサメが危険である場合に、我々は (14a) の BP 総称文を使って、サメからの危険を避けることができる。「種の性質としてサメは危険である (かもしれない)」という認識は、「サメは内在的に危険性を持っており、潜在的にはすべてのサメが危険である」という認識につながりやすい。つまり、「サメは本質的に危険な要素を持っており、それが発現していない個体についても潜在的には危険なのだ」ということになる。このような信念によれば、サメの危険性には内在的必然性がある、ということになってしまう。こうなれば、もはや IS 総称文でさえ容認可能となり、BP と IS の差が消失してしまう。

本質主義と戦い不条理な社会的偏見を防ぐには、逆に BP と IS の違いを言語学的に明確にした上で、意識して使い分けることを積極的に促さなければならない。無意識的な本質主義から逃れ、社会的偏見を防ぐためには、総称文の使い分けを明示的に教育することも必要である。

## 5. 英語以外の言語における総称文

英語総称文の複数の形式が、認知能力の複合的発達によって、デフォルト的あるいは論理的・数量的に使い分けられる可能性を見てきた。この複合的認知能力が普遍的であるとすれば、認知能力の複合性仮説 (13) は他言語でも有効であるはずである。すなわち、すべての自然言語において認知能力の複合性を反映した多様な形式の総称文が存在すること、有標の形式は大人の認知能力に対応していることが予測される。

フランス語では、総称文の無標の形式は定複数形であると考えられるが、不定複数形が総称的に使われる場合もある。藤田 (2015, p.34) が引用した De Swart (1994) の観察によれば、不定複数形 (des N) は義務・規定を表すモーダル文脈でのみ用いられる (例文の和訳は、De Swart の趣旨を汲んで岩部が付したもの)。<sup>9</sup>

- (20) a. Les agents de police ne se comportent pa ainsi dans une situation d'alarme.  
(警察官は、緊急事態においてこのようにはふるまわない)
- b. Des agents de police ne se comportent pa ainsi dans une situation d'alarme.  
(警察官たるもの、緊急事態においてこのようにはふるまわないものだ)

また、藤田は量化副詞 (Adverbs of Quantification) を伴う場合の不定単数形 (un N) と不定複数形 (des N) の違いに関する De Swart の所見も紹介している。

- (21) a. Un Italien boit généralement du vin à table.  
(一般にイタリア人は食卓でワインを飲む)
- b. \*Des Italiens boivent généralement du vin à table.

量化副詞を伴う場合、(21b) に見られるように不定複数形は不可能で、(21a) のように不定単数形が使用されるようである。(20b) のように量化副詞を伴わない場合に義務・規定を表す、すなわち必然性を表すという点は英語と同様である。ただし、英語には不定複数の冠詞がなく、量化副詞が

あってもなくても IS の形式であるのに対し、フランス語では単複の使い分けがあるようである。

このように冠詞の体系に違いはあるが、認知能力の複合性仮説が予測した使い分けがフランス語にも存在するように思われる。詳細は今後の研究にゆだねたい。

さらに問題であるのは、冠詞がなく単複の区別も基本的にしない日本語である。生まれながらのデフォルト的認知能力とその後が発達する論理的・数量的能力の複合性は、母語の種類を問わず普遍的であるはずであり、それぞれの言語の総称文においてその区別をする必要があると予測される。日本語の無標の総称文は「...は...である」という形式であると考えられるが、それで良いであろうか。<sup>10</sup> また、(20) の訳し分けにおいて、「警察官たるもの」「ものだ」という表現を無意識に使ったが、岩部 (2014) は総称文の有標の形式として「というもの」「ものだ」という表現に注目しており、(22) の IS 総称文の主語に「というもの」という日本語を当てることができそうだ、という予測を述べている。

(22) A dog has four legs. (犬というものは4本脚である)

(23) ??A table has four legs. (??テーブルというものは4本脚である)

実際、(23) の日本語訳には、元の英語の例文と同等の不自然さが認められ、「というもの」は IS に相当する有標の日本語総称文として有望な形式である。

また、(24a) では述語の部分に自由関係詞節の構造が見られるが、日本語の母語話者であるならば、表面的には同じ形の (24b) が構造的に異なることを明確に認識できる。(24b) においては、「ものだ」がモダリティ化して文全体にかかっており、「犬は吠える」という命題に義務性あるいは必然性を与えている。

(24) a. 犬は [吠えるもの] だ。

b. 犬は吠える [ものだ]。

ここでも英語の IS 総称文との関連を想起させるが、これもまた詳細は将来の研究にゆだねるしかない。冠詞や単複の区別を持つ英語においてさえ、総称文の複数形式の明確な使い分けは難しい課題であった。日本語のよう

に、総称文にどれだけの形式があり、どのように使い分けられているかが不透明な言語においては、その困難度はさらに増す。しかしながら、危険回避という総称文の根源的な用法を生かすと同時に、社会的偏見や差別という弊害を避けるためには、総称文の多様性とその使い分けを言語学的に明らかにするという課題にはどうしても取り組む必要がある。

## 注

\*本研究は科学研究費基盤研究（C）（一般）（H28～H30）「人間の認知能力の複合性と総称文の多様性」（研究課題／領域番号 16K02771）によるサポートを受けている。

1. Leslie の論文の多くは <http://www.princeton.edu/~sjleslie/> において、入手可能である。
2. 総称文は、Kahneman の言うシステム 1 と同様直観的で認知的な負担が少ないのに対し、数量詞文はシステム 2 と同様認知的な負担が大きいとされている。Sutherland et al. (in press) によれば、認知的に負担のかかるような条件下で数量詞文を覚えさせると、総称文として記憶されるという実験結果が得られている。
3. 社会的偏見につながるのは人間の特定のグループに対して総称文が用いられた場合で、(8a) がそうならないのは人間全体について述べているからであろう。また動物の中の特定の種について述べた (2ab) についても偏見や差別とは言わない。
4. 外務省の「海外安全情報」における渡航中止勧告なども同様の例であろう。安全でないとされる地域に住んでいる人も、その大半は善良な人々に違いない。そのような事実認識を持ちつつも、危険から身を守るためには、ある地域を丸ごと避けることになる。
5. BP 総称文は、デフォルト的認知能力を表すところから、とりわけ幼児期には「種を表す主語＋述語」という単純な構造をとると考えられる。その時期には、数量詞文も総称文として解釈されることから、量化の論理形式は持ち得ないと推測される。したがって、IS 総称文を聞いた幼児は、それを BP 総称文と区別して解釈することは不可能なはずである。
6. Leslie (2008) は、どの言語においても総称文が数量詞を持たない形式

であること、すなわち総称性を表すための特別な標識を持たない形式であることに基づき、総称文全体がデフォルト的認知能力に対応した無標の文形式であると論じている。本稿では、英語における無標の総称文はBP だけであり、IS や DS は有標である点で異なっている。

7. 同僚の言語学者 John Philips 氏の判断による。総称文の形式による違いがすぐには判断できなかったようであるが、しばらく考えた後、BP 総称文については「該当者が少数であるとわかっていても、全体としてそれが否定しきれないという意味で容認可能」、IS については「反例をすぐにくつも挙げるができるという意味で容認不可能」、DS については「そういう定義であるとは言えないという意味で容認不可能」というコメントをいただいた。これは、ほぼ本稿の予測する通りの結果であり、デフォルト的認知能力による即座の判断では区別は困難、論理的数量的にじっくり考えれば区別可能ということである。また、BP に関する判断は例文 (9) の二重否定構造に関する所見と一致する。IS については、内在的必然性という従来の分析とも一致する。
8. 総称文とデフォルト的認知能力との関係を主張する Leslie 自身も、量化分析の有用性は認めており、(i) の例の曖昧性は (ii) の2種類の論理形式によって区別できるとしている。
  - (i) Typhoons arise in this part of the Pacific.
  - (ii) a.  $\text{Gen}_x [\text{Typhoon} (x)] \exists_1 [\text{this-part-of-the-Pacific} (l) \ \& \ \text{arise-in} (x, l)]$   
(台風は、太平洋のこの地域で生じる)
  - b.  $\text{Gen}_l [\text{this-part-of-the-Pacific} (l)] \exists_x [\text{typhoon} (x) \ \& \ \text{arise-in} (x, l)]$   
(太平洋のこの地域では、台風が生じる)
9. フランス語では、注 8 の英語の例が次のように表現される (藤田 (2115, p.36)。英語と異なり、日本語と同様、論理表示に近い語順となっているほか、助詞のハとガに対応する冠詞の使い分けが見られる。
  - (i) Les ouragans violents naissent souvent dans cette partie du Pacifique.  
(台風ハ、太平洋のこの地域でしばしば生じる)
  - (ii) Dans cette partie du Pacifique naissent souvent des ouragans violents.  
(太平洋のこの地域では、台風ガしばしば生じる)
10. 日本語において幼児との総称的なやり取りを想定した場合、次のような

形式の使用が考えられる。

(i) キリンって、首が長いよね。

幼児との間で自然に使用される形式ということは、無標の形式であると予測される。日本語における無標の形式が一つに定まっているかどうかも含めて研究の必要がある。

### 参考文献

- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*, Longman, London.
- Brandone, A., A. Cimpian, S.J. Leslie, and S.A. Gelman (2012). “Do Lions Have Manes? For Children, Generics are about Kinds rather than Quantities,” *Child Development*, 83(2), 423-433.
- Carlson, G. N. (1977) *Reference to Kinds in English*, University of Massachusetts at Amherst Ph.D. dissertation. Also published 1980, Garland, New York.
- Carlson, G. N. (1995) “Truth Conditions of Generic Sentences: Two Contrasting Views,” in G. N. Carlson and F. J. Pelletier (eds.) (1995), 224-237.
- Carlson, G. N. and F. J. Pelletier (eds.) (1995) *The Generic Book*, University of Chicago Press, Chicago.
- Cohen, A. (1999) *Think Generic!: The Meaning and Use of Generic Sentences*. Stanford: CSLI Publishers.
- 藤田康子 (2015) 「un N/des Nと総称性」『年報・フランス研究』49: 33-46, 関西学院大学.
- Gelman, S.A., S.J. Leslie, A.M. Was, and C.M. Koch, (in press). “Children's Interpretations of General Quantifiers, Specific Quantifiers, and Generics,” *Language, Cognition and Neuroscience*.
- Greenberg, Y. (2003) *Manifestations of Genericity*, Routledge, New York.
- 岩部浩三 (1998) 「総称文と一般化」『英語と英米文学』33: 1-28, 山口大学.
- 岩部浩三 (2012) 「演繹と帰納——総称文における数量化について」『英語と英米文学』47: 1-27, 山口大学.
- 岩部浩三 (2014) 「総称文研究の新展開」『英語と英米文学』49: 1-18, 山口大学.
- Kahneman, D. (2011) *Thinking, Fast and Slow*, Penguin, London.
- Kratzer, A. (1995) “Stage-level and Individual-level Predicates,” in G. N. Carlson and F. J. Pelletier (eds.) (1995), 125-175.

- Krifka, M., F. J. Pelletier, G. N. Carlson, A. ter Meulen, G. Link, and G. Chierchia (1995) "Genericity: an Introduction," in G. N. Carlson and F. J. Pelletier (eds.) (1995), 1-124.
- Lawler, J. (1973) *Studies in English Generics*, University of Michigan Papers in Linguistics 1.1, University of Michigan Press, Ann Arbor.
- Leslie, S.J. (2007) "Generics and the Structure of the Mind," *Philosophical Perspectives* 21-1: 375-403.
- Leslie, S.J. (2008) "Generics: Cognition and Acquisition," *Philosophical Review* 117-1: 1-47.
- Leslie, S.J. (2014). "Carving Up the Social World with Generics," *Oxford Studies in Experimental Philosophy*, 1: 208-232.
- Leslie, S.J. (in press) "The Original Sin of Cognition: Fear, Prejudice and Generalization," *The Journal of Philosophy*.
- Leslie, S. J., S. Khemlani, S. Prasada, and S. Glucksberg (2009). "Conceptual and Linguistic Distinctions between Singular and Plural Generics," *Proceedings of the 31st Annual Cognitive Science Society*. Cognitive Science Society, Amsterdam.
- Prasada, S. (2010) "Conceptual Representation and Some Forms of Genericity," F. J. Pelletier (ed.) *Kinds, Things, and Stuff*, 36-59. Oxford University Press, Oxford.
- Sutherland, S.L., A. Cimpian, S.J. Leslie, and S.A. Gelman (in press). "Memory Errors Reveal a Bias to Spontaneously Generalize to Categories," *Cognitive Science*.